第４章　触読の学習の実際

点字学習のレディネスが形成され、点字への興味・関心が高まれば、点字の読み書きの学習を開始することができる。点字の触読の学習には多くの時間を必要とするので、児童生徒の実態を十分に把握したうえで、絶えず観察を続けながら学習状況に応じた丁寧な指導を行うことが大切である。

本章では、点字触読の導入段階における一般的な学習プログラムを取り上げる。その内容は、次のとおりである。

(1) 両手読みの動作の習得
(2) 点字の枠組み（行・マス）の意識化
(3) 単位となる一マス６点の弁別
(4) 点字の形と字音の結び付け
(5) マスあけ（分かち書き・切れ続き）の基礎的な理解

プログラムとしては(1)から順に提示はするが、(1)の両手読みの動作の習得の題材を終えて(2)に入ったとしても、それで両手読みの動作を獲得したとみなすのではなく、(1)に加えて(2)のプログラム、次いで(1)(2)に加えて(3)のプログラムというように、習得した内容を積み上げていく意識をもって指導することが重要である。

なお、ここで取り上げる内容は小学部低学年児童に対する点字触読の導入を想定した指導内容であるが、中途視覚障害者や重複障害の児童生徒への点字導入に際しても、提示する題材を工夫しながら同じ内容を用いることができる。

また、文字の学習では、基本的には読みと書きが互いに補い合うものであることから並行して学習を進めることが一般的である。自分が書いたものを読んだり、周囲に読んでもらったりする活動は、学習の動機付けにもつながりやすい。しかし、点字の場合は点字タイプライターや点字盤の扱いを習得することも必要となり、「自分の文字を習得する」段階での過重負担は避ける必要がある。

まずは、話し言葉における音と文字を結び付ける読みの学習を先行する。清音が読めるようになった程度で、書きの学習に入るとよい。ただし、児童の実態によっては、点字タイプライターや点字盤による書きの指導と並行して行うなど、弾力的な取り扱いも必要である。

第１節　両手読みの動作の習得

１　両手読みの動作習得の意義

左手読みでも右手読みでも、片手読みの場合は、改行動作に時間を要する。また、最初に片手読みの習慣を身に付けてしまうと、両手読みに移行することが極めて困難となる。そこで、文字としての点字触読の学習に先立って、まずは両手読みの動作を身に付けることが大切である。

望ましい両手読みとは、原則として左右両手の指先を使用して点字を読むことである。人差し指を主としつつ、中指・薬指を補助的に使用する。右手の３本の指先は主として行の後半をたどり、左手の３本の指先は行の前半を受けもつようにする。その場合、行末に近い部分を右手の指先で読んでいる間に、左手の指先は次の行の行頭へ移る準備に取り掛かるようにする。そして、右手で行末を読み終わると同時に左手で次の行を読み始める。右手はすぐにこの左手に添えてその行の誘導を行うようにする。この両手の分業の繰り返しによって点字の触読は進められるのである。このように、両手読みにおいては、右手でも左手でも点字が読めなければならない。この場合、左手は行の前半を、右手は行の後半を受けもって読むことになるが、左右の手が受けもつ割合は、読み手によって異なっても差し支えない。

点字は、左から右へ指を移動させながら読むものであるから、先に行く右手の指で読むようにして、左手はそれを後から追随するという右手を主とした読みの方が自然ではないかという考え方がある。確かに左手で読むことを指導しないと、ほとんどの場合は、右手で読むようになる（利き手が左手の場合は、左手ばかりで読んでしまう）。手や腕の動かし方から考えても、右手で読む方が左手で読むよりも自然である。しかし、右手だけで点字を読むようにした後で、左手でも読めるようにするのはなかなか困難であり、左手で読めるようになったとしても読みの速度が伸びないことが多いといわれている。

また、点字を使用して学習する場合、左手でメモを読みながら右手で作文の清書をしたり、左手で問題文を読みながら右手で解答を書いたり、一方の手で図形を読み取りながら他方の手でその証明を読んだり、というように両手を使って学習する機会は非常に多い。さらに、点字タイプライ

ターや点字キーボードを活用して学習する場合も、両手を使って右手でも左手でも点字を読むことができるようにしておくことが必要である。したがって、点字触読の初期の段階から両手で読めるように指導することが極めて重要なのである。

２　両手読みの動作習得についての留意事項

両手読みの動作をスムーズに行うために、入門期には、平らで適度な堅さの面に置かれた点字用紙で学ぶことが最も望ましい。特に低学年の初学児童の場合は、Ｂ５変型判の通常の点字用紙全紙ではなく小さな手でも扱いやすいように半分に切った用紙を使用したり、必要に応じて行間やマスを空けたりして、対象児童の様子を十分観察しながら教材の工夫をすることが必要である。重複障害の児童生徒や中途視覚障害者への点字導入に際しても、同様の工夫を期待する。特に、上下の行の干渉を避けるためには行間は９㎜程度あけることが望ましいので、初期教材の作成では１行ずつあけてもよい。

第２節以降にも関連するが、点字触読の動作習得のための一般的留意事項としては、以下のとおりである。

①当初から両手読みの指導を重視する。

②点字の上に両手指を置き、両手の人差し指を軽く接触させることを基本にする。

③指先を立てずに、指先の腹をつかう。その際、強く押しつけすぎないよう留意する。

④指先の腹で一マスの６点を同時に認識し、上下に探る指の動きをできるだけ排除して真横になめらかに指を移動できるような動きを確立する。

⑤行たどり、行替えの動作の指導を大切にし、両手の分業へとつなげられるようにする。

⑥両手読みの動作の習得に合わせて点の位置の弁別学習に入るが、点字の一マスの枠組みが十分に理解できるようにつとめ、安易に文字としての指導に進まないように留意する。

⑦点字の読み学習全体をとおして、「あったよ」「いっしょだね」「どっちかな」「これも同じ形だよ」などと教師や友達と楽しく会話しながら、言葉も育てていけるような支援を行っていく。

３　両手読みの動作習得のための題材例

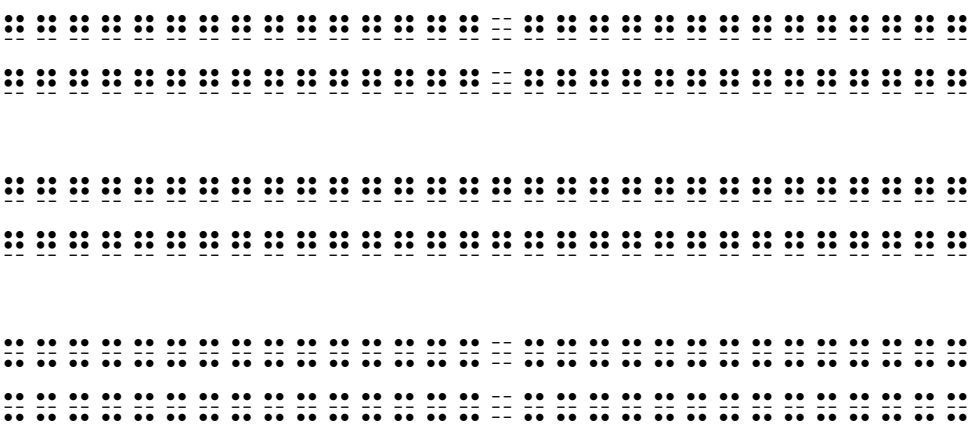
本節では、初学の児童の学習内容として両手読みの動作習得のための題材を掲載する。これらの題材を用いた学習をとおして、基本的な両手読みの動作の習得をねらい、次節以降の点字の枠組みのイメージ形成につなげていく。さらに、一マス６点を一つの単位として認識することを意図して指導し、点字の形と字音とを結び付けていくが、常に両手での行たどりの基本動作を確認しつつ、学習活動を展開してほしい。

前章で述べたように、上肢の運動は、肩関節を中心とする円運動になりやすいため、行を直線的にたどれず、手指を弓なりに動かして、行の上にはみ出す場合もみられる。幼児期から「スライディングブロック」などを用いて、直線運動ができるように触運動の統制を行っておく必要がある。また、日常生活の中でも、引き戸の開閉などを経験することによって、ひじと手首の関節を微妙に調節できるようにしておくことも大切である。中途視覚障害者の場合でも、直線運動のための触運動の統制が十分にできていない場合がみられる。そこで、両手での行たどりや改行のための運動への導入を指導しておく必要がある。

このような両手読みの最も初歩的な段階として、両手指によって行をたどったり、改行したりする動作の定着と習慣化を図る必要がある。そのためには、次のような学習を行うことが大切である。また、両手読みによる行たどりや改行動作の学習をとおして、１ページにおける行と行間のイメージも形成していくことができる。

【題材４－１】

「両手で正しくたどりましょう（１）」



⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿
⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿

「両手で正しくたどりましょう（２）」

⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒
⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒
⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒
⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒

⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠒⠒⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿
⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠒⠒⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿
⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿
⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿

⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠒⠒⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿
⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠒⠒⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿
⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿
⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿⠿

（ねらい及び留意点）

児童にとっては点の多い⠿の線よりも指に当たる刺激の少ない⠒の線、指の腹が落ちる⠒の線の方が負担が少なく、抵抗なくたどりやすい。また、行の中間に空きマスを設けて、一息つけるような工夫も有効である。たどり方としては以下のとおりである。

・両手指で行の終わりまで正しくたどる。
・両手指で行の終わりから戻り、行替えする。
・両手指で行をたどり、行の半ばを過ぎたら右手だけで残りをたどる。
　左手は先に改行し、右手が追随する。
・両手の指先は立てずに点字の上に置き、両手の人差し指を軽く接触さ

せてたどる。指先の腹でたどるが、押さえすぎないように注意する。

・両手指の行たどりに習熟したら、左右それぞれの指で別々にたどる。

【題材４－２】

「両手で左から右までたどりましょう（１）」

⠿⠿⠶⠶⠶⠶⠶⠿⠿

⠿⠿⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠿⠿

⠿⠿⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠿⠿

⠿⠿⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠿⠿

⠿⠿⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠿⠿

⠿⠿⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠿⠿

⠿⠿⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠿⠿

「両手で左から右までたどりましょう（２）」

⠒⠿⠿⠒⠶⠶⠶⠶⠶⠒⠿⠿⠒

⠒⠿⠿⠒⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠒⠿⠿⠒

⠒⠿⠿⠒⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠒⠿⠿⠒

⠒⠿⠿⠒⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠒⠿⠿⠒

⠒⠿⠿⠒⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠒⠿⠿⠒

⠒⠿⠿⠒⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠒⠿⠿⠒

⠒⠿⠿⠒⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠒⠿⠿⠒

（ねらい及び留意点）

起点はすべて行頭であるが、終点は行の途中の場合もある。

⠿⠿や⠒⠿⠿⠒で示された終点まで指先を立てずに、指先の腹でできるだけ滑らせるようにたどる。押さえつけるようにしない。

起点に両手指を正しく置き、終点までたどり、両手指で戻る。

起点に両手を置き、右手だけで終点までを往復する。さらに終点に両手を置き、起点までを左手だけで往復する。

両手指の行たどりに習熟したら、左右それぞれの指で別々にたどる。

「１本の線路」や「２本の線路」などの言葉で表現しながらたどったり、終点の形を触知できたら「ゴール」、行を移して「次のスタート」をすばやくしたりするなど、言葉と動作も関連付けられるとよい。

第２節　点字の枠組み（行・マス）の意識化

１　触読の特性と点字の枠組み

点字は、触覚によって読み取る文字である。点字の上に指先を置いて、左から右へ移動させることにより読むことができる。ただ置いただけでは点の弁別はできない。指の運動により、通過した部分の点を弁別して読み取っていく。点字熟読者であっても、指先が点字に接した部分の一字一字しか読み取ることはできない。そのため、視覚によって漢字仮名交じり文を読み取るような一覧性はなく、指先に触れた文字の短期記憶を積み重ねながら長い文章を読み取っているのである。

また、漢字仮名交じり文の墨字では文節の頭にくる言葉が漢字で表記される場合が多く、視覚によって意味の切れ目を認識しやすいが、表音仮名文字の点字では、文章を続けて書くと意味の切れ目が認識しづらい面がある。

こうした触読の特性*[16]から、点字では、小学校低学年用の墨字の教科書にみられるような分かち書きを採用している。この分かち書きの切れ目に当たる部分を点字では一マスあけて表記する。この文字を書かないであけた部分を「マスあけ」という。

両手読みの動作の習得と同時に、一字一字をとらえるための点字の枠組みを十分に意識する必要がある。点字用紙は罫線のない白紙と同じであるから、ただ点があるだけではそれが何を表しているのかが分からない。行や行間あるいは隣のマスや隣の点との相対的な位置関係で、その点が何の点で、それが何の点字記号を表しているのかを判断することになる。その意味で、文字としての点字を習得する前に、点字の枠組み（行・マス）の